

束芋

たばいも
アーティスト

束芋「悪人」より 2006～07年
©Tabaimo / Courtesy of Gallery Koyanagi

「感謝しなさい」。

幼いころから何かにつけて親に言われ続けてきた言葉。先日、同世代の演出家の友人と話しているときに「僕たちの世代はこの

感謝の行方

@Nagano

に気づいた。

感謝をすることはいいことだから、感謝はいつもしなくてはならない。両親が教えてくれたことが間違っているとは思わない。世界中で飢えに苦しんでいる人がたくさんいるのに、毎日三食のご飯を食べられることに感謝するべきだし、多少、皮膚の疾患があったとしても、五体満足で生を受けたことは感謝に値する。でもその感謝の行き先は一体、どこにあったのだろう。

「自分は〇〇に比べていい状態にあるのだから、それを実感する」。子どものころ、まだ幼い頭で考えた「感謝の仕方」は常にかうだった。そして、両親から「感謝しなさい」と言われるたびに、その「感謝の仕方」を繰り返して、今や自分流感謝の達人になった。そして、つい最近までその幼い考え方はまったく成長せず、疑問を持つこともなく、「いいこと」として私のなかでかなり高い地位を獲得していた。

神様に感謝する。神道の森羅万象に神が宿るという考え方を幼いころに理解するにはあまりにも体験が乏しい。毎日三食のご飯を食べられることを自然の恵みだと実感するのに、スーパーに並んだ野菜をお金と引き換えにしている親の姿を見ても実感にはほど遠い。野菜を育て収穫する工程は代理の人々がやってくれる。私たちはそれに見合うだけの別の仕事をし、その労働を共

通通貨のお金に換え、それが生きて行くための食べ物に変わる。

大自然に感謝するには大自然が遠すぎる。だから「神様に感謝する」という、当時まったく意味不明な言葉で片付けてきた。そして、不幸な人に比べて幾分か幸福な自分も、「神様のおかげ」とした。

だから、日本では宗教と聞くと「何だか胡散臭い」と思ってしまうのか。自分自身がつくり出した胡散臭い神様、それに感謝することを強要されてきたかのような錯覚。

自然のなかで暮らし始め、絡まっていた糸が少しずつほどけてきた。感謝の対象と誰の手も借りることなく挨拶ができる。自分よりも不幸な対象を必死になつて探さなくてもいいという開放感に、ねじれてしまっていた思考もゆっくりあるべき姿に戻って行っているような気がする。